フィンランドの育児パッケージ 人生のスタートも平等に

Ministry for Foreign
Affairs of Finland

フィンランドでは赤ちゃん誕生に際し、全ての母親に手当が支給されます。140ユーロの現金支給、もしくはベビー服やケア製品の入った育児パッケージのどちらかを選ぶことができます。毎年、手当てを受給する６万世帯のうち、３分の２は育児パッケージを選択します。

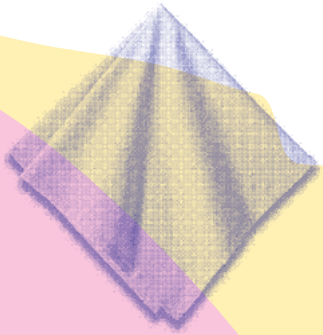
育児パッケージは、1937年にすべての子供たちの人生のスタートを分け隔てなく祝福、歓迎し、生活環境を整えるために誕生し、今日に受け継がれています。所得制限はありませんが、受給するにはネウボラ（出産・子育て支援センター）もしくは医療機関での妊婦健診の受診が必要です。リスクの早期発見・早期予防にもつながり、乳幼児の死亡率は世界最低レベルを維持しています。

1938年

1月1日、フィンランド出産育児助成法により、およそ3人に2人の妊婦が母親手当を受給できることになった。手当の総額は当時の労働者階級の平均月給3分の1以上に相当。貧困家庭には赤ちゃんが眠れる清潔な場所が必ずしもなかったので、赤ちゃん用ベッドとしても利用できるよう、箱が工夫された。

1930年代–40年代

家庭では裁縫が一般的であり、既製品は少なかったため、育児パッケージの中には赤ちゃんの洋服を作るための布地が入っていた。今日の育児パッケージにもいまだに木綿布地は欠かせない。



戦時 (1939-1944)

1940年代は布不足であり、当時の社会保健省はフランネル、平織り綿およびシーツ類のすべてを国軍のために確保するとした。しかし、防衛省は1941年前半まで、母親手当のための繊維品割当てを確保することに同意した。この後、育児パッケージの物資不足が続いたが、政府は爆撃や撤退により家を失われた人々に対し支援を続行したいと考えていた。

1942年から1946年まで、深刻な繊維品不足のため、育児パッケージには代用品が多くなり、紙製の母親用ベッドシーツやオリジナル生地が採用された。

1949年

手当の所得制限が撤廃され、家庭の所得に関わらずフィンランドのすべての母親が受給できる権利を得た。新しい法令には、手当の受給を希望する母親が、妊娠4ヶ月までに内科、助産師、あるいは市の妊婦健診を受診することが組入れられた。母親手当は、妊婦健診への動機付けとして効果を発揮し、フィンランドの妊婦と乳幼児死亡率は大幅に改善。世界トップレベルの母子の健康を達成するのに大きく貢献した。

1950年代

育児パッケージの中身は徐々に増えていった。衣服は白か無漂白の綿だったが、母親たちはそこに自分たちで刺繍をするなど工夫をしていた。1957年以降、布地と裁縫道具は完全に既製品に取って代わられた。

育児パッケージの内容

(毎年若干の変更あり)

マットレス、マットレスカバー
シーツ、布団、布団カバー
防寒着/ 寝袋
寝袋/キルト
帽子類
タイツ、靴下、手袋
オーバーオール
ウールのオーバーオール
ボディスーツ
ロンパース
レギンス
ベビーバスキット
布オムツ
バスタオル
乳頭ケアクリーム
コンドーム
ブラパッド

1960年代-70年代

ライフスタイルと消費者傾向の変化は、育児パッケージのアイテムにも影響を与えた。

1970年代では、伸縮性のない綿やタオル地から、ストレッチ性のあるロンパースやカバーオールタイプの衣類に代わっていった。洋服の色も白からカラーが増えていき、このころから洗濯機も一般的に普及しはじめたため、汚れが目立たないような色彩の衣類はあまり提供されなくなった。

1968年

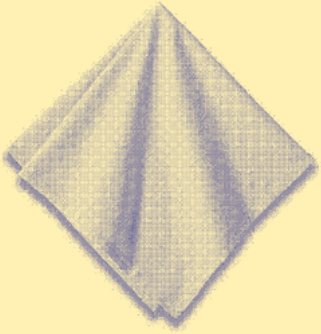
これまで育児パッケージに入っていたキルトが寝袋に代わり、寝袋のデザインは、赤ちゃんの生まれた年代がわかるように毎年変更された。

1980年代–90年代

1980年代に入ると国民の生活が安定してきたことにともない、引き続き育児パッケージの支給が必要か否か議論となった。しかし、若い親たちにも育児パッケージは非常に人気があったため、支給が継続されることとなった。育児パッケージには知育や心理面にも配慮し、絵本など両親と子供たちのコミュニケーションを促すアイテムが加わった。1990年には、新しくボディースーツがパッケージに採用された。

2000年代

2000年代に入ると、パッケージの内容は社会保険庁が製品メーカーの競争入札方式で決定するようになった。アイテムは男女共用で、価格や用途、さらに両親からの要望、感想も取り入れながら少しずつ改良されている。

環境への配慮の重要性が増すにつれ、2006年から布のおむつが導入され、2009年に使い捨ておむつが廃止された。それにより、ごみ処理場のオムツの数が70万枚減少した。少しずつ変化を遂げる育児パッケージだが、綿素材の生地は初期の頃から変わらず採用されている。

2017年には育児パッケージの箱のデザインコンペが開催され、受賞作品がその年秋の実際のパッケージに採用された。